

タルカ ッ ト 書 簡 — 訳 お よ び 註 (一)

鈴 木 恒 彌
若 山 晴 子

序

本稿「タルカ ッ ト 書 簡 — 訳 お よ び 註」は、タルカ ッ ト 女 史 の 米 国 伝 道 会 (アメリカ ン ・ ボー ド) クラーク博士宛ての書簡中、明治5年(1872)12月3日より、明治8年(1875)8月4日にいたるまでのものをおさめた。すなわちタルカ ッ ト 女 史 が、日本伝道の召命に応じ、出発に先だち、未だ本国にあって米国伝道会との打ち合わせをはじめた時点より、神戸女学院の前身である神戸山手の「寄宿学校」設立の直前までの期間である。学校設立以後、女史が神戸を去り岡山での新たな伝道活動を開始するまでの事情を伝える書簡は、続いて発表する予定である。

タルカ ッ ト 女 史 を は じ め と す る、米 国 伝 道 会 「宣 教 師 文 書」は、もと神戸女学院百年史を編纂するための史料として用いられたものである。編纂の当初、百年史とともに、史料集も記念出版するようにとの案が「学院史等出版委員会」の席上議せられたが、「宣教師文書」は単に一女学院史の史料であるのみではなく、初期明治史の史料としても広く活用されるべきであるという理由で、むしろ「論集」誌上に発表するのが適当であるという結論を得た。本稿はこれに応ずるものである。

本稿のテキストは、他の宣教師文書とともに、ハーヴァード大学ホートン・ライブラリーに保管されているが、先年関西学院大学文学部川村大膳教授が同地に留学の際、これらをマイクロフィルムにおさめ持ち帰り、同教授の厚意によりコピーを許されたものを使用した。インキで手記されている書簡は、百年近い歳月の間に文字はうすれ、あるいは裏面の文字が透けて見え、表裏の文字、行が重なるなど、判読は極めて困難であったが、若山晴子が判読、活字化し、

さらにトルコの古都スミルナ（イズミール）にあって、同地の大学のライブラリアンとしての奉仕を終え、アメリカに帰国途上のギーゼンタナー女史（Miss Marguerite Giezantanner）が、これに検討を加えた。これら二人の努力にもかかわらず、判読不能の箇所は数個にとどまらなかった。また、ギーゼンタナー、若山兩人の間で、判読に関し意見が相違し、しかもいずれとも決し難い箇所も見られた。これらの場合はその旨を註記し、訳はひかえた。

訳は若山訳を鈴木が検討したが、訳文は若山の文章である。

凡 例

- ☆ 書簡左肩の号数は、米国伝道会（American Board Commissioners for Foreign Mission）本部における整理番号である。発信人の書簡の数とは関係がない。
- ☆ American Board Commissioners for Foreign Mission は通例 A. B. C. F. M. と略称される。本文中では米国伝道会と訳した。ただし書簡文中では簡略に Board あるいは Mission Board と記されていることが多い。Board は単に伝道会と訳出した。なお同じ文中に伝道団とあるのは mission の訳で、現地の宣教師団を指す。
- ☆ 米国伝道会年次報告（Annual Report of the A. B. C. F. M.）の略号として A. R. を用いる。
- ☆ 米国伝道会の月刊機関紙 Missionary Herald の略号として M. H. を用いる。
- ☆ 関係代名詞等にひきいられた節や挿入句等で直接地の文に入れにくいものは（ ）をつけて挿入した。
- ☆ 訳出の際補足した語句は〔 〕に入れた。
- ☆ 書簡原文解読の際の判読困難の部分は〔……〕で示し、註をつけて説明した。なお、一応解読したつもりであるが、場合によっては検討の余地もあるかもしれないという語句には特別な符号をつけず、番号のみを附して註に加えた。

I have been thinking of you very much since I saw you last night. I hope you are well and happy. I have been very busy lately but I will write to you as soon as I can. I love you very much and I hope you love me too. I will be with you in a few days. I have been thinking of you very much since I saw you last night. I hope you are well and happy. I have been very busy lately but I will write to you as soon as I can. I love you very much and I hope you love me too. I will be with you in a few days. I have been thinking of you very much since I saw you last night. I hope you are well and happy. I have been very busy lately but I will write to you as soon as I can. I love you very much and I hope you love me too. I will be with you in a few days.

Dear Mother
I have been thinking of you very much since I saw you last night. I hope you are well and happy. I have been very busy lately but I will write to you as soon as I can. I love you very much and I hope you love me too. I will be with you in a few days. I have been thinking of you very much since I saw you last night. I hope you are well and happy. I have been very busy lately but I will write to you as soon as I can. I love you very much and I hope you love me too. I will be with you in a few days.

I have been thinking of you very much since I saw you last night. I hope you are well and happy. I have been very busy lately but I will write to you as soon as I can. I love you very much and I hope you love me too. I will be with you in a few days.

Yours affectionately
Eugene Turner

317

where the murmuring of the stream in the gorge below us is constant music in our ears. "Our (.....) have truly fallen in pleasant places."

Of the expressed wish by some Sanda people that a church should be organized in Sanda you have doubtless heard. Miss Dudley has just gone over there to talk with the woman. I have only been here in Arima two days but have already had one opportunity of telling of Jesus to one young man who heard it for the first time. He listened with evident distrust and surprise, and left promising to come again and bring some friends with him. Dr. Berry was quite tired out when he came up here two weeks since, but is resting and already much recreated. We are a mile from the Davis'. Mr. Davis is resting vigorously as usual. Mrs. Doane a little improved since coming up here. Yours truly—

Eliza Talcott.

タルカット¹⁾ 書簡

1872年12月3日²⁾～1875年8月4日³⁾

訳

第308号⁴⁾

コネティカット州

ニューロンドン⁵⁾

1872年12月3日

クラーク博士⁶⁾様

拝啓

12月2日附貴信、只今拝受いたしました。そしてわたくしは、この2、3日胸の内に育んでおりました希望につき、早々にお知らせ申し上げるのがよろしいかと考えたものでございます。先週の土曜日、まるで靈感のように、ある若い婦人のことが思い浮かびました。この方につきましては、わたくし共が女学生同志でありました頃、ほんのわずかおつきあいしていただけなのですが、この方が、教養高く、天分豊かで、人の心をひきつけ、知人の誰彼から愛されており、またすべて善き活動に積極的であることを存じておりました。わたくしはすぐにこの方に手紙を書き、わたくし自身の計画を告げて、わたくしと一緒に来て下さるかどうか尋ねて遣りました。只今便のある毎にその返事を心待ちにしております。この方はおよそ28歳。敬虔な組合教会の牧師様のお嬢様ですが、このたびの問題に関しましては、わたくしの考えがこの方に立出の決意をさせ得ますかどうか、わたくしには定かではございません。わたくしにとりまして

は生涯最良の仕事でありましょうけれども。わたくしがこのように尙早に認めますのは、このことが、万が一にもそちらの御計画を変更したり、あるいは暫時未決定のままにとどめたりすることになりましては——と慮ってのことでございます。

敬具〔謹んで〕⁷⁾

イライザ・タルカット

第309号⁸⁾

コネティカット州

ニューロンドン

1872年12月19日

クラーク博士様

拜啓

15日附貴信、たつた今頂戴いたしました。わたくしは、2月には日本に向けて出発する準備が整うと存じます。旅仕度のためのお手当は、ありがとうございます、必要とは思われません。

敬具〔謹んで〕

イライザ・タルカット

わたくしはダッドレー女史⁹⁾の書類をいただいております。先にお申しこしのように、これを送らない方がよいとお考えなさいましたのでしょうか。—
E. T.

第310号¹⁰⁾

コネティカット州

ニューロンドン

1872年12月13日

クラーク博士様

拝啓

只今、先に申し上げました若い婦人から、現職（教職）を離れて伝道活道に携わるよう召されているとは思えない旨、知らされたところでございます。

がっかりしております。行ってもらえるものと期待しておりましたから。けれども神の御計画は最善でございますし、わたくしをもきっとその中にお加え下さることでしょう。そちらからの今後の御指示を待っております。

敬具〔謹んで〕

イライザ・タルカット

ヘボン博士¹¹⁾のお便りを頂戴いたしました。興味深く読ませていただいております。

第311号

コネティカット州

ニューヘイヴン¹²⁾

1873年1月21日

クラーク博士様

拝啓

1月11日附貴信，たくさんの同封書類共ども，拝受いたしました。ありがとうございました。わたくしは，パスポート事務のことにかかっています。

わたくし共が日本でどこに行くべきか，またどなたのもとに赴くべきかということにつきまして，何もおっしゃっては下されませんのですね。

敬具〔衷心から〕¹³⁾

イライザ・タルカット

住所：ニューロンドン

第312号

クラーク博士様

拝啓

27日附貴信，30ドルの小切手，それに待望の御指令，ともに今朝拝受いたしました。ありがとうございました。

敬具〔衷心から〕

イライザ・タルカット

コネティカット州ニューロンドン

1873年1月28日

第313号¹⁴⁾

神戸 日本

1873年4月12日

クラーク博士様

拝啓

この日出づる国よりお便りを差し上げ、かつ、当地の伝道団の心からなる歓迎を受けましたことをお伝えできますのが、嬉しうございます。もっともこちらの皆様方は、わたくしの来日につきまして、ダッドレー女史がたまたまそのお手紙の中でお触れになったのを除きますと、何の通知も受けてはいらっしゃいませんでした¹⁵⁾。その郵便はわたくし共の船で着いたものでしたから。けれどもわたくしは大変あたたかい歓迎を受けましたもので、自分がとび入りの客であったとは、数日後まで知らなかったくらいでございました。わたくし共は横浜まで26日間の船旅をいたしました。途中ずっと風はありましたが嵐にはありませんでした。横浜に着きましたので、わずかの時間ではありましたが、ルーミス氏¹⁶⁾と〔……〕¹⁷⁾夫人とをお訪ねいたしました。この訪問は両方とも大層楽しくございました。大阪湾に碇泊いたしました31日の朝、グリゲン氏¹⁸⁾とデイヴィス氏¹⁹⁾とがわたくし共を出迎えて下さいました。わたくし共はすぐにデイヴィス氏の御家族に受けいれられて落ち着きました。

さしあたり、ダッドレー女史とわたくしは、用意万端整いました上で決定すべき将来の仕事を〔……〕²⁰⁾、一緒にやっけてゆく決意をいたしました。

当地でのわたくし共の家は気持のよいもので、背後には山々、前方には美しい湾、そして近くには他の伝道団の家々がございます。これらは皆感じのよい家庭で、この方々とおつきあいしておりますと、わたくし共、非キリスト教世界に在ることを大方忘れてしまいます。

今週のわたくし共の祈禱会のテーマは「婦人のための活動」でございました。わたくしには多少ともなすべき仕事が見えてまいりましたので、準備態勢にあることに辛抱しきれなくなってまいりました。わたくし共は日本語の勉強を始めました。それ故初めのように全部が全部同じように見えるということではなくなりました。わたくし共は言葉を習いますのに大層都合のよい所におりまして、とても末頼もしいことでございます。1日のうちで最も興味深い時間は、

奉公人たちが、朝、在宅中の家族とともに聖書を読むために集まる時でしょう。その他の人々もしばしばわたくし共のところに来てまいります。初めて貴い真理に触れる人々と共にこれを拝読し、また、デイヴィス氏がキリストのみ言葉を説明なさる時に彼らが見せる驚きや受容の様子を見ておきますと、わたくしには、この貴い真理が新たに味得されるのでございます。

街で出会う少女たちの多くは大変魅力的に見え、わたくしは彼女たちと話しあえるようになりたいと切に願っております。わたくしは、当地に在りますことに、またこの小暗い国に福音の光を与えるために何かをなし得ようという望みの故に、深い感謝を捧げるものでございます。

敬具〔真に衷心より〕²¹⁾

イライザ・タルカット

— 本部着 5月23日 —

第314号

有馬 日本

1873年 6月16日

クラーク博士様

拝啓

6月2日附貴信、只今頂戴いたしました。そうしてわたくしは、たとえ自分が前々から予期されておりましたも²²⁾、これ以上の心からなる歓迎を受けたり、また、デイヴィス氏夫妻のお宅以上に心地よい家庭を供されたりすることはできなかったことでありましょう²³⁾と確答申し上げられるのが嬉しうございます。実を申しますと、こちらの方々は(グリーン家は、奥様が御病氣のことであり、別といたしまして)、エキストラ・メンバーを骨身を惜しまず受け入れて下さることのできる唯一つの家族でしたが、しかもここでは、客間も居間も応接室

も子供部屋もすべて兼用なものですから、恒久的な間取りとして使用に耐えるものとは申せません。デイヴィス氏は、ダッドレー女史の来日がわかった時、すぐ、御自分の家に小さな部屋を二つ増築なさいました。それで難なく、ダッドレー女史とわたくしのために、一室を明け渡して下さることができたのでございます。秋の、ドーン夫人²⁴⁾の来日や、アッキンソン氏²⁵⁾御一家が暫時デイヴィス氏御夫妻のもとに迎えられる予定のことも見こして、グリーン家よりお招きをいただいておりますので、わたくしは、9月1日に有馬より帰りましたら、そちらにうかがうことになりましょう。わたくし共の一家は、これからふた月を、暑気と蚊との来襲からのがれて、山間で過ごすことにしております。もっとも、先生方もわたくし共も、勉強という面では、神戸でしておりましたよりもずっと励んでおります。わたくしは日本語の勉強を大層楽しんでおります。また、自ら期待しておりましたよりも、はるかに首尾よくやっております。聖書の真理というものは、それが初めて未知の心に与えられるのを聞いておきますと、何と貴いものに見えることでしょうか。そうしてわたくしは、どれほど、毎日わたくし共の所に訪れて来る大勢の人々のために、何かしてあげられるようにと切望していることとございましょう。デイヴィス夫人は、御自分が、去年皆で有馬にやってきた時よりも、ずっと強くなっているとおっしゃいます。で、わたくし共はこの変化に希望をおいております。また、ドーン夫人の来日は、あの方のために大いにお役に立つことでしょうか。多分、他の宣教師方からのお便りがございましょう。意見は多々ありましようとも、調和の精神〔…〕²⁶⁾そして決断が相和しておりますれば、それは証し人にとりまして喜ばしいものでございますし、また思いますに、異邦人に対する有益な証しでございましょう。

ダッドレー女史はお元気で、よろしくとのこととでございます。

敬具〔真に衷心より〕

イライザ・タルカット

—本部着9月18日

返信10月16日—

1874年 5月16日

N. G. クラーク博士様

拝啓

最近のお便り、本当にありがとうございます。当地での他の宣教師方のお働きにつき充分の情報をお持ちでいらっしゃることを知りまして、また婦人伝道会²⁷⁾とわたくしとの関係が親会社²⁸⁾とのそれよりも親密であることや、わたくしの手紙類は、そちらで、十分に尊重されるべきものとは申せぬまでも、より必要とされているということを感じまして、最近、文通で先生をお悩ませ申し上げることが、最善必至のこととは思えなくなりました。

もっとも、わたくし共の前に開けております仕事のすばらしい道程に、自分の証しを加える機会の増しますことは、嬉しうございます。

定例の説教礼拝のほかに、日曜学校、祈禱会、週四回の晩の聖書研究のクラス、わたくし共の伝道団三家庭での毎朝の礼拝（ここではキリストの御生涯を心して読み、学んでおります。）、24名の婦女子を擁するわたくし共の学校²⁹⁾があり、その上、わたくし共の周囲の家々は、全てわたくし共に門戸を開き、聖書に関する話が、あるいは黙認され、あるいは求められております³⁰⁾。また、わたくし共は当地で、身も心もはちきれんばかりでございますが、若干の仲間たちが内陸部に入ってゆける時も間近かのように思えます。せめてわたくし共に、主のみ名において入りこんでゆき確保するのに充分な素養を身につけた人人の組織集団がありましたら、この国のクリスチャンたちは、この活動における自分たちの責任を感じており、種を蒔くことを切望しておりますが、また、この活動のための修練の必要を痛感し、それだけに一層、自分たちが外国語だけで聖書を読めるようになることを願っております。鈴木³¹⁾はグリーン氏と共に京都とその近在を旅して、つい先頃帰ったばかりですが、琵琶湖を渡って

る時、船の甲板に座っていた百人ばかりの旅客にデイヴィス氏の小冊子⁸²⁾を配り、それから、中のいく人かと話を始めましたところ、この「新しい道」について、甲板の高い所に立って皆に話すようにと請われました。彼は承知して、2時間の余も話しました。あとでこの話をしました時、彼は言いました。「あの人々の中には学者も何人かおりました。そうして、ほかの問題について私は全く何も話せませんでした。しかし私の心は充ちておりました。私は自分自身の考えと経験とを話したにすぎません。神がお援け下さったのだと確信しています。」事実、この青年たちの〔……〕⁸³⁾成功はとても大きくございまして、こういう処で彼らが謙遜にしていられるのは、神の御恩恵による以外にないと思われるほどでございます。教会⁸⁴⁾に關係しております4人の婦人方のうち、榮之助⁸⁵⁾の未亡人はいささか気落ちしておられます。他の3人のうち1人は、日曜学校の小さな子供たちのクラスで、外国人では及びもつかぬような、彼らの理解力に適った言葉で教えております。もう1人の方は、御主人を教会に〔……〕⁸⁶⁾、どこでも活動する用意ができております。のこるお一方は大名の御母堂⁸⁷⁾ですが、ダッドレー女史と女史の先生と一緒に、1、2週間の予定で三田に赴かれました⁸⁸⁾。あちらの婦人たちに手をさしのべようというおつもりなのです。あちらでのデイヴィス氏のお骨折りは男子だけが対象でございましたから、わたくし共は、女子を教えようというこの尽力に、大層希望をかけております。ここ、神戸におきましては、教会の会員数は間もなく2倍になりましょう。そしてわたくし共は、入ってくる方々が、只今在籍中の11人⁸⁹⁾と同じように熱心な働き手となりますようにと、願うのみでございます。学校の少女たちに関しましては、このうちに若干のクリスチャンのおりますことに、大きな期待をかけております。わたくしは、この人たちが自宅で祈っていることも知っております。翌日の説教をよく理解できるようにその教を熟読しましょうと招きましたところ、これに應えて8人が先週の土曜日にやって参りました。この人たちは傾聴ということにはおよそ慣れていないのです。わたくし共の学校の先行きについて考えます時、これまでの神の篤実さのおかげで、「私の恩恵はあなた方の必要の全てを充たす」⁴⁰⁾、という主の御約束に信頼をおく⁴¹⁾こと

ができるのでございます。

わたくし共はすぐにも寄宿学校を開設できますよう望んでおります⁴²⁾が、そのためにはもっと御助力をいただかねばなるまいと存じます。わたくし共は、才能あり、十分な養成を受けた教師を入れなければなりません。ここの少女たちには、単に宗教教育のみではなく、彼女たちが他の人々の教師となって⁴³⁾やってゆけますような、世俗の訓練をも受けさせようございますので。アダムス夫人⁴⁴⁾と伝道会に対し、わたくし共の一家の主婦役として夫人に来ていただきたい旨、すでにお願いたしました。グリーン氏夫妻のおっしゃりようから察しますに、夫人はわたくし共のために、広い範囲の直接的伝道活動に携わるのと同じ位、立派な助けとなって下さるにちががありません。

当地に在り、キリストについて多少のことを話すことができ、そうしてたびたび、驚きや感謝にあふれた反響を耳にいたしますことは、非常な恩典でございます。少しばかり前わたくしは、公開の説教礼拝を聞きにゆく勇気のなかった一人の母親に、イエスのことについて話しましたのち、キリストの生涯の聖画をいく枚か与え、あなたは御自分のお子さん方に誰よりも上手にイエスのことを話してあげられることでしょうか、とほめめかしました。今日は、その方の母上が50マイルの遠方から訪ねて来られたのに会いました。話を始めてわかりましたことは、娘さんは母上にカードを見せてイエスについて自分が知っている限りのことを話したのですが、この方は、もっとたくさんを熱心に求めているというのです。わたくしはカタコトでしか話せませんでしたけれども、こういう真理^{かけら}の欠片のようなものにも神が力を与えて下さるようにと祈りました。

諸教会における神の霊の常ならぬ現存に關しまして故国より届く^{おとづれ}音信に、喜びの声をあげております。この地の果てに在るわたくし共のためにお祈り下さる中に、新しい方々も声を併せていて下さることがわかります。多くの真心が、祈りとお金だけでなく、御自分や身内の方を異教の地で働くためにお献げ下さるよう、奮いたたせられますように。

わたくし共はよく、当地で御目文字が叶い、忠告や励ましのお言葉をうかが

うことができれば、どんなにか喜ばしいことでしょうかと話しあいまして、この願いの成就する日の近からんことを望んでおります。

キリストにおいて

敬具〔真心こめて〕⁴⁶⁾

イライザ・タルカット

一本部着 6月27日

返信 7月22日

第316号⁴⁶⁾

神戸

1874年12月1日

クラーク博士様

拝啓

9月に戴きましたボストンからの荷の中に、ダッドレー女史とわたくしのため聖書の絵をお加え下さいまして、ありがとうございました。これらは、ホームができましたらしかるべき場所に納まりましょうが、只今のところ狭い部屋にありまして、わたくし共に助けと慰めを——という御意向にてわたくし共を見守っていて下さる、思いやり深いお心遣いのすばらしい記念でございます。

わたくし共は、ガールズ・ホームを⁴⁷⁾建てるためのお許しを待っております。わたくし共の控え目な願いをお聞き届け下さるのを最善とお考えいただけることでしょうかとの、全き確信を持ちまして。家事につきましては、ダッドレー女史が、むしろ教職を人に譲って、そちらを引き受けようと決心なさいました。あの方は、仕事の直接的な役割⁴⁸⁾のために〔……〕⁴⁹⁾そして豊富な機会を見い出されることでしょう。多分、おっしゃるように、ジュリア・ギューリック女

史⁵⁰⁾が手伝いに来て下されるかも知れません。もっともあの方は、当分は御自分の勉強と御両親の世話とで、そういう時間をお持ちではないのですけれども。

わたくしは⁵¹⁾、学校の重要性を無視するつもりはございませんが、しかしながら、全く学校に参りませんでも、わたくしの時間を全て費やして余りあるほどの仕事を見出し得るのでございます。時には本当に、家庭の婦人たちの間での活動が有望なものですから、わたくしがより広い視野に立ち、わたくし共の仕事は将来どれほど多くこの少女たちのお蔭を蒙ることになりますかを実感いたしませんと、学校での仕事にはほとんど満足を感じさせられなくなります。

わたくしは⁵²⁾只今、ベリー博士⁵³⁾夫妻と播州〔……〕⁵⁴⁾への診療旅行に出かけたいと思っておりますが、校務を一週間ばかりギュリック夫人⁵⁵⁾にお預け（もし夫人が引き受けて下さいますならば）しておいてそういたしましたものか、決めかねております。

わたくしの思いは、9月にあちらで⁵⁶⁾で会いました貧しい婦人たちにひかれております。わたくしにもう一度やって来るようにというこの人々の懇願は、単に儀礼的なものではなかったように思えます。一人の気の毒な婦人の顔と言葉とが忘れられません。この人は、いつもの朝拝のあと、わたくしの所にやってきてこう言いました。「もしお天道様を拝んではならないのでしたら、私共、何を拝めばいいのでしょうか？」この人は、話の一部を聞きかじって、救世主の観念をつかみそこねたのでした。こういう人々の信頼を勝ち得ることはあながちむずかしいことではございませんが、そういう喜びにつきまして、また、この人々をキリストに引き寄せようと努める活動に関しまして、本当に、半分もお伝えすることは叶いますまい。

それはそうと、なぜ、ベリー夫人のお友達でバス⁵⁷⁾においででのスタンウッド女史⁵⁸⁾の来訪を思い止まらせなさいましたのでしょうか。ベリー博士夫妻はお二方共、あの方が有能な働き手であることを確信しておいでで、女史が来日されないというので大層がっかりしていらっやいます⁵⁹⁾。ベリー夫人は、いつも誰かが御自分と一緒にいてくれるようにと切にお望みなのです。そうして、も

し、その方が、医者の家にいることを存分に活用なさいますなら、土地の医師たちや患者たちとの交わりの中に、活動の豊かな機会がございます。わたくしは、わたくし共の伝道団が、自分たち自身の健康管理につき若干の教訓を学んでゆくようにと願っております。神経の過労は、人が実感する以上に大きくて、ついにはそれに打ち負かされてしまうものでございます。レヴィット氏⁶⁰⁾は、過去数週間、わたくし共の〔.....〕⁶¹⁾室を使っておいででしたが、〔.....〕⁶²⁾の第一の取り柄は、狭すぎて(8×10)、とじこもっているわけにゆかないということであるとおっしゃいました。氏は、多少の仕事を引き受けられるとよいが——という希望をもって、土曜日に大阪にお戻りになりました。わたくし共、まだあの方が一緒においででした頃、ある土曜日の朝でしたが、山間に徒歩遠足に参りました。また、わたくし共は、皆時間を惜しんではおりますけれども、若干の方々を散歩に〔.....〕⁶³⁾するつもりでございます。わたくし共は、数日中に加わってくるでしょう新来者を待ちかねております⁶⁴⁾。ああ、神のみ力がわたくし共一同の上にとどまり、かくて、この地で、そのみ名が豊かに讃えられますように。

敬具〔衷心から〕

イライザ・タルカット

わたくし共は新島氏⁶⁵⁾に大いに期待いたしております。若干の点におきまして、あの方の試練は、わたくし共には計り得ないほど大きいこととございます。わたくし共はただあの方の喜びが、それにふさわしく大きなものでありますようにと、願うばかりでございます。

—本部着1875年1月

—返信 3月10日—

1874年 8月 7日

クラーク博士様

拝啓

当伝道団宛ての最近の貴信（日附が手元にございませんが）により、伝道会のはっきりしたお気持として、寄宿学校のために寮母をお遣わし下さるおつものないことを知りました。

わたくし共が不用意に用いました寮母という言葉が、そちらで、このことに対するわたくし共の願望につき誤解を生ぜしめましたことは明らかでございますが、すでに伝道団の他の皆様がこの諒解ちがいに關しまして、そちらに書き送っておいでのことと存じます。

ダッドレー女史とわたくし、兩人が思いますのは、わたくし共が寄宿学校という意味あいでの少女たちの継続的な世話を、それも特に、学校とは関係のない婦人たちと共に聖書を読むという活動（わたくし共が企ててまいりましたもので、中止いたしますのは惜しうございます）を見込んで、お引き受けすることになりますと、わたくし共の仕事のためにもう一人協力者がほしい——ということでございます。そしてこの意見につきましては、伝道団もわたくし共を支持して下さいました。わたくし共は兩人共に、伝道団の御家族から家庭に受け入れていただきましたこと、またその結果、家事から全く解かれて、時間と力を全て学ぶことと教えることに費やし得ましたことに、深く感謝いたしております。わたくし共は「何を食べましょうか」という類^{たぐい}の気をそらすような考えにそれほど悩まされずに働いてまいりましたが、その程度の仕事を続けてゆきとう存じましたので、家事の才能（それはどの婦人にも備わっているわけではございません）をお持ちの協力者を求めたい心地がいたしました。わたくし共の家庭は、他の伝道団の家庭と同じく、きちんとして、しかも楽しく、日本の友人たちに、魅力と教訓とを同時に伝えるものであってほしかったのでございます。これは、わたくし共の仕事と同じく、真に宣教的な仕事以外の何

でございましょう。そして「わたくし共の奥様」は、疑いもなく、直接的な指導の機会をたくさんお見つけになることでしょう。わたくし共はなお、主が、貴方を通じて、わたくし共の求めております助け手をお遣わし下さるようにと、希望いたします。わたくし共が望んでおりますのは、少女たちの監督をする方は、その仕事によってわたくし共の仲間入りをすることにはほかなりません。わたくし共は皆、少女たちは自分たち本来の簡素な生活様式を採るべきであると思っております。外国の生活の習慣を採用いたしますと、元々の友人たちとあまりにも隔たってしまうこととございましょうから。わたくし共が考えかつ望んでおりますのは、必要な限り少女たちの衣食のことを取り締まりますのに、頼りになる日本の婦人を求めるということとでございますが、これは非常に実際的なことと申せましょう。わたくし共に当地の若干の外国人たちのような財力がありましたなら、この人々のように、食物の準備支度は一切使用人まかせにしてやってもゆけませんが、こちらでは本国でと同じく、家事支出のごく細かな節儉のために主婦役じきじきの監督を必要といたします。そしてその結果生じまいります使用人たちとの交わりは、教訓によると等しく模範により、忍耐、機敏さ、正直、また福音的諸徳の全てに向けてこの人たちを訓育いたしますよう、不断の機会を与えてくれるのでございます。が、少なくともわたくしの思いますには、一人の人間にとりまして、それは、学校での教育活動からの気持の転換となるに違いないことが明らかでございます。ともあれ、ダッドレー女史とわたくしとは、精神的一致と協力とを喜んで誓ってまいりました。わたくし共は、充分にお役に立てますように仕事の義務と責任とを分かちあう、一つの家族の構成員のようなものでなければなりませんから。これは光栄ある仕事でございます。そして、日々の進捗を書き記すわけにはまいりませんが、進捗の紛れもない徴しは、大層励みになることとでございます。

今月は暑さがはなはだしく、主日の〔……〕⁶⁹⁾ 礼拝はいたしますが、日曜学校の方は9月1日までお休みにするのが適当かと思われまます。土地の人々も、外国人クリスチャン〔……〕⁶⁹⁾と同様に、ぜひとも休養が必要なのを感じております。わたくし共、秋には元気を回復して仕事にとりかかり、宣教師の家庭

におきましても学校におきましても同様によく、日々の聖書活動を行ないたいものと願っております。わたくしの日曜学校のクラスはちょうど、マタイ伝を読み始めました。それで大変興味深うございます。お休み前の最後の主日には、10人の婦人が参りました。

わたくしは、神戸に仕事を残して有馬に参りますことには、あまり気のりがいたしませんでした⁷⁰⁾。けれども、こちらにも仕事はございました。わたくし共の参りましたのは美しい所で、およそ317年の昔、将軍が湯治のため有馬にみえるときの宿所として、立派な調度をしつらえた寺院でございます。現在、礼拝の場としてはさびれておりますが、その上の^{かみ}壮麗さの跡は残っております。松林や楓の繁みは目をたのしませ、その辺り、目の下の谷の流れのささやきが不断の音楽と聞こえてまいります。「われらの〔……〕⁷¹⁾はまことに、心地よい所に下ってきた⁷²⁾と。

三田の人々数人が、三田に教会を組織してほしいという望みを開陳いたしましたことは、多分お聞き及びでいらっしやいましょう。ダッドレー女史は、あちらの婦人方と話し合うためにおでかけのところでございます。わたくしは、2日間、ここ有馬にいたにすぎませんが、もう、イエスについて話す機会を得ました。相手はそういうことを聞くのは初めてという青年でございました。彼は、あからさまな不信と驚きとをもって耳をかたむけておりましたが、友人たちを連れてもう一度やって来ると約束して帰ってゆきました。ベリー博士は、2週間前こちらにおみえになった時には、すっかり疲れきっておいででしたが、休息中のところ、もう大分回復なさいました。わたくし共、デイヴィス家とは1マイルほど距たっておりますが、デイヴィス氏はいつものようにお元気です。ドーン夫人はこちらにおいでになってから、いくらかよくなされました。

敬具〔衷心から〕

イライザ・タルカット

一本部着 9月14日

返信 9月16日

1874年12月 5日

先週のある日、22歳ばかりの、外国の服を見事に着こなした男の方が、ペリ博士はおいでかとこちらに⁷⁴⁾みえました。この人が言いますには、博士がイエスの宗教の教師であると聞いたので教えを乞いたいとのことでございました。はじめ、博士⁷⁵⁾は、この人は医学を学びたいのであらうとお考えでしたが、すぐに、そうでないことがわかりました。この人は、名古屋から来たのでした。〔名古屋は〕神戸からおよそ100マイル、横浜と当地との間にあって、開港ではありませんが、かなり重要な港でございます。この人は、江戸で4年間官庁に勤めておりました、そこでイエスの宗教について聞いたことがあったのですが、それがどのようなものかは、学ばずじまい⁷⁶⁾でした。帰郷の際に大阪に立ち寄り⁷⁷⁾、そこの礼拝堂の前を通りかかって入りましたところ、ゴードン博士⁷⁸⁾がイエスの話をしておいでなのを耳にいたしました。彼は一人の日本人（キリスト教の信仰告白をした人ではありませんでしたが）に、どこに行けばこの宗教についてもっと学べるだろうかとたずねました。すると、神戸では外国人と日本人とが一緒になって教えている、との返事でございました。教えてくれた人は、大阪でそれを学ぶ便宜については⁷⁹⁾知らなかったようでございます。

博士⁸⁰⁾はこの青年としばらくお話しになったのち、あまり勉強にはなるまいが、自分たちは今教師を求めている、そして⁸¹⁾、他の教師方に通常支払ってきた6ドルの月給は差しあげられよう、とおっしゃいました。青年は、3ドル戴きましょう、けれども自分が最も望んでいるのは「道」について学ぶことです、と言いました。これはすばらしいことでした。彼は、できるだけ早く、郷里の人のところに出かけて行って、それについて語れるようにと願いました。彼は、そちらの人々の多くが、喜んでそれを受け入れるでありましょうと知っておりました。それ故、彼は、表向き教師として毎朝ここにやって参りますが、その実、どのような形にもせよ、得られる限りの聖書の真理を吸い取っております。

ベリー博士⁸²⁾がお出かけのおりは⁸³⁾、ベリー夫人とわたくしは、彼にわたくし共の仲間に入ってもらいます。彼と話しますのは、何よりも楽しみなことと申せましょう。

先日⁸⁴⁾、彼と共にマタイ伝を順を追って読み始めましたところが、ある事柄が、彼の知りたがっていた別のことを思いつかせまして、とうとう自分を抑えきれなくなってしまうように見えました。わたくし、前の便にて、も少し年上の方の同様のケースについて申し述べましたが、今回はそれよりもっとすばらしいございました。そこには、わたくしがかつてどこでも出会ったことのないような、新鮮さと輝きとがございます。それに、潜在的な、ほとんど本能的な、神の霊の御導きに対する信仰（これは最初に会得されるべき真理の一つでございますが）がございます。今日、彼は名古屋に在る御両親に本を送ることにいたしました。そうして、自分のすばらしい発見につき何と書きましたことか、彼は本当に駆りたてられております。彼は一時的にある婦人のところに下宿している⁸⁵⁾のですが、この婦人は、彼に、ここで何の仕事をしているのかと不思議そうにたずねました。それに対して彼は、自分がイエスについて学ぶために来たことを告げ、さらに続けて⁸⁶⁾、自分が聴き知ったことを語りました。婦人は驚いて耳をかたむけておりました。昨日はある男の方に会い、同じような質問を受けました。彼が答えておりますと⁸⁷⁾、その人は、自分はこの宗教がこの人生にとって大変によいものであると聞いている、そこで自分もこれを勉強したいのだが、自分は⁸⁸⁾屋間は忙しすぎて、どうやって学べばよいのかわからない、と申しました。神田さん⁸⁹⁾（名古屋の人でございます）はこの人に、只今毎週やっております三つの夜の集會の話をしました。その一は⁹⁰⁾、月曜日の夜のデイヴィス氏のお宅での求道者のための集まりで、このようなケースのために計画されたもの。もう一つは火曜日の夜の礼拝堂での祈禱会で、これには外国人は出席しておりません。それから金曜日の夜⁹¹⁾のアッキンソン氏のお宅での正式の礼拝祈禱会でございます。彼は、自分が聴き知ったことを全て物語り、また、学んだことは直ちにお話ししようと約束したと申します⁹²⁾。

彼は、ここに参りまして間もないある日、熱心にたずねました。「もし、朝昼晩、それに食事の直前に祈れば、それで充分でしょうか？」彼は、ここに参りました最初の日、ここに泊まってわたくし共と食事を共にいたしました。そして、ベリー博士が日本語で祝福を求める祈りをなさいました。爾来、彼はいつも食前にそのようにしております。ところが、彼の滞在していたところでは、ちょうど彼が祝福を願おう⁹³⁾と始めたところに、戸障子の開け閉てに大きな物音をたてて給仕の婦人がやって参りました。そこで彼は、このような場合には、食事が運びこまれるより前に、少し早目に祝福を願ってもよいものか、それとも、祈りの間中、食膳の整えられるのを目のあたりにしておらねばならぬものか、知りたかったのでございます。これらの疑問に答えておりますうちに、考えが明らかになって、彼は難なく宗教の靈性を理解いたしました。

この人は、政府とかなり近い関係にありまして、迫害をおそれる理由はいささかもないと確信している⁹⁴⁾と申します。もしも政府にそれ〔キリスト教を是認すること〕だけの勇気があれば⁹⁵⁾、すぐにもキリスト教を是認することであろう⁹⁶⁾、しかし下層階級は自分たちの宗教に執着しているので、キリスト教が公けに是認されたとすると騒動がおこるかもしれないということを政府は恐れているのだ——ということでございます。こちらの土地のクリスチャンたちは、通例、他人のことに関心を示す指導者というものにいく分の疑念を持っております。そしていつも、わたくし共宣教師たちはいささか⁹⁷⁾信用しすぎのきらいがあると考えております。けれどもこの場合、この人々は懐疑的ではございません。懐疑をいれるべき余地はございません。

一本部着

1875年5月11日—

第319号

神戸 日本

1875年8月4日

クラーク博士様

拝啓

ボストンにようこそお戻りなさいました、と、このお慶びの言葉を、他の友人たちにいたしますと同じく、通常の私用箋に認めたい衝動にかられたのでございますが、結局、この非公式の書状のために大きな用紙を用いまして、先頃の失礼の償い⁹⁸⁾とさせていただきますと決心いたしました。先生がミッション・ボードのお役目にお戻りなさいますことは、ワード氏⁹⁹⁾よりうかがいましたが、何よりのことでございます。また、お仕事への御復帰が、御健康の完全な回復を妨げたり遅らせたりいたしませんよう、願っております。フロリダではわたくしの姉妹¹⁰⁰⁾にお会い下さいました由、嬉しうございます。彼女から先生の御消息が聞けますのは、楽しうございました。わたくし共の経済的窮状¹⁰¹⁾に対しましての御親切な御同情に感謝いたしております。ダッドレー女史とわたくしとがお願い申し上げた何がしかのことに御同意下さいますことは、伝道団の御損になることではありませんでした。もっとも、必要経費を見通すということになりますと、伝道団のどなたかの方には単に不首尾と見えたと存じますけれども。

わたくし共は、伝道団の皆様方から大変思いやりある御親切をいただいております。アッキンソン氏は建築委員会¹⁰²⁾の議長でいらっしゃいますが、わたくし共にとってと同様御自身にとりましても目新しい仕事の中で、よくわたくし共を援けて下さいました。わたくしは、この経験が、わたくし共の誰彼にとって、無駄なものとなりませんようにと願っております。わたくし共はこの学校に輝かしい希望を抱いております。けれども、わたくし共は、婦人たちの間で一般的活動に携わる喜びを、これまでよりも差し控えなければなりません。もしもどなたか適任の¹⁰³⁾方があらわれて、わたくし共の手から学校を引きとり、そうしてわたくし共を他の仕事のために解放して下さいません限りは。わたくしは、三田のほかに5箇所を有望な地域と思い、そのいずれの所にでも喜ん

で赴き、三田の事業の再現を見たいものと考えております。最近の京都への忙しい旅は、官立の学校の視察と、わたくし共の学校の日本人教師を求めるのが目的でしたが、短い訪問の間にも四つ乃至五つの様々な機会が出てまいりまして、長居して徹底させられたらと、切に望んだことございました。

三田教会の組織¹⁰⁴⁾のことはお聞き及びでいらっしやいましょう。それは、目下の豊かな楽しみでございまして、とりわけそこで働いている者たちにとりましては、特別の喜びでございました。ダッドレー女史は、あちらで婦人たちに対してのみならず、男子の方々にも感銘を与えなさいました¹⁰⁵⁾。と申しますのも、時に、兄弟方が、諫めや忠告は反抗をひき起こすのみと感じられますような場合も、婦人はもっと上首尾なものでございますから。

三田の人々はダッドレー女史に対し、この世ではこれ以上の大いなる報いを受けることはないと思われまますような謝意の表し方をしております。

当伝道区は、各自が御報告申し上げていることと存じます。一同、暑い間はできる限り休養するよう心がけ、概して健康を回復してまいっております。ゴードン博士は、大変嬉しいことに、ずっとよくおなりのように¹⁰⁶⁾お見受けいたします。ベリー博士夫妻は函館に御滞在ですが、わたくし共、これが有益でありますように願っております。その間、わたくしはグールディ女史¹⁰⁷⁾と御一緒しておりますが、デイヴィス氏御一家が山におでかけの間デイヴィス家に部屋を構えておいでのダッドレー女史が、食卓をかこみにみえます。今日はデイヴィス氏がわたくし共と食事を共になさいました。氏は休息なさった御様子で、山でのテント生活のことばかりお話しなさいました。新島氏は京都においでで、御自身かなり好調と思われまますが、あちらに神学校を建てるために熱心に働いていらっしやいます。氏は、わたくし共の伝道団仲間にとりまして、重宝なばかりか、とても愉快な新入者です。長々しい「短信¹⁰⁸⁾」をお教し下さいませ。先生が、お時間の上でもお手間の方からでも、読みきれないほどたくさんの書簡類をお持ちでいらっしやいますことは、存じてはおりますのですが。

敬具〔衷心から〕

イライザ・タルカット

—本部着 9月15日

返信10月20日—

註

- 1) Eliza Talcott (1836—1911). J. E. ダッドレー女史と共に、米国伝道会によって日本に派遣された独身婦人宣教師の嚆矢とされる。来日1873年。以後その生涯を日本人伝道のために捧げ、神戸にその骨を埋めた。略伝は、組合教会創立以来の牧師・伝道師・宣教師のうち大正4年までに帰天した人々の列伝として編まれた「天上之友」にも収められている (pp. 179-186.)。
- 2) タルカット女史の米国伝道会宛書簡の第1信である。女史はまだ日本での行先を知らない (1873年1月21日附書簡参照) が、当時わが国では、先着の D. C. グリーンや J. D. デイヴィスが神戸にあって、宇治野英語学校を開いたところであった (J. C. ベリー: 1872年11月9日附書簡, D. C. グリーン: 同12月16日附書簡, J. D. デイヴィス: 同12月23日附書簡参照)。デイヴィスはまた、これに先立つ11月11日附書簡の中で、キダー女史の活躍にふれ、神戸にも2、3名の婦人宣教師がほしい旨記している。タルカット、ダッドレー両女史の日本到着は、切支丹禁制の高札がとりおろされ始めてまだ日も浅い1873年3月末のことであった (タルカット女史の書簡第313号, 1873年4月12日附及びその註14参照)。
- 3) この書簡では、学校の建築のことにも触れている。但し、タルカット女史の便りは、こののち、1876年10月18日まで途絶えてしまう。この10月18日附書簡から察するに少くとも一通の不着便があったらしい (1876年3月20日附のダッドレー女史の書簡にも示唆されている。) が、この間の事情は不明である。
- 4) 米国伝道会宛てタルカット女史の第1信である。
- 5) New London, Conn. とある。
- 6) Nathaniel George Clark (1825-1896). 米国伝道会の Corresponding Secretaries の一人。1865年に Officers of the Board に選出され、1894年に健康上の理由から役職を J. L. Barton に譲る (M. H., 1896, February, pp. 51-53.)。

- 7) Respectfully Yours とある。
- 8) 本信は日附から言えば次の第310号のあとにおかれるはずのものである。
- 9) Julia E. Dudley (1840-1906). タルカット女史と共に来日した。ダッドレー女史の1873年2月14日附クラーク博士宛ての書簡には、その朝タルカット女史からの手紙を受け取ったと記されているが、実際に2人が顔を会わせたのは、共にサンフランシスコを出港する直前のことであった (*The History of Kobe College*, p. 1.)。神戸を中心に広く伝道活動に携わり、1900年帰米。略伝は「天上之友」にも収められている (pp. 145-148.)。
- 10) 本信は日附からいえば前便に先立つものである。
- 11) James Curtis Hepburn (1815-1911).
- 12) New Haven, Conn. とある。
- 13) Yours truly とある。
- 14) タルカット女史の日本からの第1信である。タルカット、ダッドレー両女史の米国出発及び日本到着のことは、M. H., 1873に次のように報じられている。
- Departure.....Miss Julia E. Dudley, of Elgin, Illinois, and Miss Eliza Talcott, of Plymouth, Conn., sailed from San Francisco, March 1, for Japan to join the mission there. Miss Dudley is supported by the Woman's Board of Mission, Boston and Miss Talcott by the Woman's Board of the Interior. (M. H., 1873, April, p. 133.)——但しこの記事の後段に関しては、ダッドレー女史はシカゴ (the Woman's Board of the Interior の本部がある) に近いイリノイの人であり、タルカット女史はボストンの側のコネティカットの出身であったところから、誤記があったと考えねばならない。
- Arrival Messrs. Talcott and Dudley, who sailed from San Francisco, March 1, to join the Japan mission, arrived at Kobe March 31. (M. H., 1873, August, p. 269.) なお同様の事柄は1873年秋の年次報告にも記されている (A. R., 1873. p. 69.)。
- 15) この件に関しては次便も参照。また同年4月15日附米国伝道会宛ての書簡においてデイヴィスは「.....私は、この分野に婦人を派遣することに関し、一言申し述べずにはすませない気分でおります。タルカット女史来日においてなされたやり方がそうさせるのであります。.....タルカッ

ト女史の来日については……伝道団は 何も知らず、従って女史を受けられる準備を前もってしておくことができませんでした。……当然のことながら女史は、みじめな、多少とも気の滅入る思いをしたのであります。女史の場合、このことから重大な害が生じたわけではありません。しかしこれが、もっと若くずっと自律心のとぼしい婦人の場合であれば、結果は一層由々しいものとなったにちががありません。……」(……部分訳者省略)と述べ、今後の対策として、婦人宣教師を派遣するについては少なくとも一か月前に通知されたいこと、その婦人と受け入れ家庭との文通がのぞましいこと、等、4項目の提言を行なっている。

- 16) Henry Loomis (1837-1921). グリーンの妹婿。長老派宣教師として1872年来日、1921年輕井沢に歿す。
- 17) 判読困難。Pruynes のようにも見えるが不詳。但し、the Woman's Union Missionary Society of America から派遣され1871年来日したプライン夫人 (Mrs. Mary Pruyn) が横浜にあった(「日本プロテスタント史研究」p. 71及び p. 78参照)ので、この人のことかとも思われる。
- 18) Daniel Crosby Greene (1843-1913). 米国伝道会派遣宣教師として来日した最初の人。来日1869年、1913年葉山で帰天。(「天上の友」pp. 187-194. 伝記としてはE. B. Greene 著 “A New Englander in Japan: Daniel Crosby Greene” がある。)
- 19) Jérôme Dean Davis (1838-1910). 米国伝道会派遣宣教師。来日1871年、1910年帰米中に帰天。(「天上之友」pp. 160-169. 伝記として J. M. Davis 著 “Davis - Soldier Missionary” がある。)
- 20) 判読困難。learning とともに leaving とともに読める。
- 21) Very truly yours とある。
- 22) 前便及びその註15参照。
- 23) ……that had I been a long time expected, I could not have received a more cordial welcome……と解説。但し裏の文字がすけているため判読困難であった。殊に received に関しては字の画数から見てやや無理があるが、他にも時折用いられている略記法に準じて rec'd のように読むことができるのではないかと思われる。
- 24) Clara H. S. Doane. カロライン諸島の伝道に従事していた Edward T. Doane (1830-1890) の夫人でデイヴィス夫人の姉妹。健康を害したため

- 1873年秋休養のため来日 (M. H., 1874, January, p. 12. 及び 1875, January, p. 10. またデイヴィスの書簡中 1873年1月31日附, 5月2日附及び10月1日附も参照できる)。
- 25) John L. Atkinson (1842-1908). 米国伝道会派遣宣教師。来日1873年, 神戸に歿し春日野墓地に葬むられた。〔「天上之友」 pp. 149-154. なお「神戸教会月報」にもその消息がうかがわれる。〕
- 26) 用箋の折り目にかかっているため, 写真に出していない部分が一行ある。但しこの行の後半は前の ページにインクの 浸みているところから判断し, and the determi- (determination の前半) と判読。その前に 2, 3 語あるものと思われるが, これは推測し難い。
- 27) 当時, 婦人宣教師は, 米国伝道会の協力機関である婦人伝道会の組織下にあった。この婦人伝道会は地域別に三つに分かれており, ボストンに本部をおき合衆国の東部を受けもつ the Woman's Board of Missions (WBM), シカゴに本部を持ち, 中西部を担当する the Woman's Board of Missions of the Interior (WBMI), サンフランシスコに本部のある the Woman's Board of Missions of the Pacific (WBMP) とから成っていた (*The History of Kobe College*, p. 1.)。従ってコネティカット州の出身であるタルカット女史は the Woman's Board of Missions (WBM) に所属していたわけである。
- 28) the parent society とある。当時アメリカン・ボード (本稿では米国伝道会と訳出) は米国伝道会社と呼称されていたことにかんがみ「親会社」と訳してみた。
- 29) 明治6年 (1873) 10月, タルカット, ダッドレー両女史は花隈村前田兵藏方に学校を開き, 翌1874年4月にこの教場を北長狭の白洲退蔵の持ち家に移した (*The History or Kobe College*, pp. 2-3. 「神戸女学院百年史 総説」 p. 20.)。この書簡はちょうどその頃のことを報じていることになる。またダッドレー女史は, これよりおよそひと月後の6月20日附米国伝道会宛て書簡に, 次のように記している。「……昨年10月に小さな学校を開きました。これは, 年配の生徒 (多くは既婚婦人でございます) の出席が不規則なのですが, 全部でおおよそ30名を数えるくらいかと存じます。」
- 30) ダッドレー女史もまた, 次のように報じている (同上: 1873年6月20日附書簡)。「わたくし共はしばしば生徒たちの家庭を訪れ, 友人の数に入

れられるようになりました。わたくしは、数か月の間に、わずかではありますが、共に聖書を読むことができるようになり、何軒かの家では、家族たちも一緒に読んでおります。」

- 31) 鈴木 清のことか。鈴木 清は三田藩の人で、攝津第一基督公會（現神戸教会）の創立にあたって受洗した11人の1人に数えられる。(参照:「日本組合基督教會史」p. 20. 「三田市史」p. 677, p. 709. また、「神戸教會略史」「神戸教会月報」にもその名が散見される。)
- 32) デイヴィスは1874年早々「眞の道を知る近道」と題する冊子を出版しているの、これをさすものであらうと思われる。この小冊子は「半紙半裁11枚の木版刷」で「明治7年初め神戸で出版」(藤原美幸「宣教の季節」一歴史と神戸・33., 1963年12月一)された。
- 33) 判読困難。Giesentanner 女史は一応 meeting としたが uniting とも読める書き方である。
- 34) 同年4月19日設立をみた攝津第一基督公會である(参照:「日本組合基督教會史」pp. 20-21, 「神戸教會略史」p. 7.)。
- 35) この固有名詞は文字面だけでは判読し難かった。最初のYにつづく字から Yeinoske (あるいは i) と判断した。この Yeinoske(i)は明治4年(1871)6月に、聖書等の禁書を所持していたことを理由に逮捕投獄され、明治5年(1872)11月25日に獄死した市川榮之助である。従ってこの本文は 夫榮之助を獄中で失った直後の未亡人市川まつ子の傷心の姿であらう。市川榮之助は、明治2年来日した米国伝道会最初の宣教師グリーン日本語教師をつとめ、さらにギュリックも彼に日本語の教えを受けている。彼は江戸の生まれであるが、グリーンが江戸より神戸に宣教の中心を移したのに 随行して神戸に住むこととなった者である。逮捕以前の明治3年頃の榮之助に関しては、グリーンによって、米国伝道会に報告されている(M. H., 1870, September, pp. 285-286.)。また榮之助の逮捕投獄、獄死に関しては、A. R., 1872, p.68., M. H., 1873, April, pp. 125-126. にそれぞれ報告されている。なお、市川榮之助の逮捕の証拠となった彼の所持した聖書のうち「約翰傳福音書」は、神戸女学院図書館に収蔵されており、同書に附せられているグリーンの手紙により、同書はヘボン訳のヨハネ伝を榮之助自身が筆写したものであることが知られている(参照:「神戸女学院百年史 総説」pp. 7-12.)。
- 36) 判読困難。Giesentanner 女史は brought としているが、画数から見る

と無理である。bro't と略記しているものか。led と読むにもいささか難のある書体である。

- 37) **the daimio's mother** とある。大名とは旧三田藩主九鬼氏のことであるが **mother** は不明である。しかも既出の同年6月20日附のダッドレー女史の書簡にも **the mother of our daimio** という表現が用いられている一方、C. B. DeForest 女史はその著 "*The History of Kobe College*" において同じ事柄を **wife of ex-daimyo** のこととして記している (p. 2.)。
- 38) 三田と宣教師たちの関係については「日本組合基督教會史」 pp. 27-30. 「三田市史」 pp. 704-707. 「神戸女学院百年史 総説」 pp. 26-29等において紹介されているとおりであるが、この1874年初夏のダッドレー女史の三田訪問については、同年6月20日附の女史自身の書簡の中で次のように報告されている。「三田のことにつきましてはすでにお聞き及びのことと存じます。わたくしは、数週間前、交誼を得ております大名の御母堂とわたくしの師と共に10日ばかりをあちらですごしました。たくさんの方が聞きに参りました。時には百人の余も出席いたしました。」同じ月、デイヴィスは、三田と神戸での「婦人による婦人のための」活動について報じ(6月1日附)、この書簡は M. H., 1874, October. p. 316に転載された。また、明治8年(1875)には三田教会の設立を見るが、この時の米国伝道会年次報告は、特にダッドレー女史のこの地における勤労努力を評価している (A. R., 1875, p. 58.)。1875年8月14日附タルカット女史の書簡も参照。
- 39) 攝津第一基督公會の最初の受洗者たち。(参照：「日本組合基督教會史」 p. 20.)。
- 40) 出典不詳。コリント人への第2の手紙12章9節の "**My grace is sufficient for thee.**" に応ずる表現か。
- 41) **to rest on** と読む。Giesentanner 女史は **trust in** としているが、画数、書式からみると3語ととる方が妥当のように思われる。
- 42) 学校設立の希望が正式かつ公式に開陳された最初のくだりである。ダッドレー女史はこれから約1か月後の書簡で **a home where girls may be under our more direct influence** の必要を説き、また三田の婦人たちが娘の教育を女史に委ねたがっていることも報じている(1874年6月20日附)。さらに1874年の年次報告には「ダッドレー、タルカット両女

- 史のもとにある女学校は、その初めの11月の頃以来規模も有為性もいやまさり、今や25名を擁している。現在の学校が教師生徒双方に利することは明らかであり、われわれは神戸に女子の寄宿学校を開く時が到来したと確信する。この学校における宗教的関心は、最も注目に値するものとなってきている」とある (p. 60.)。
- 43) to be teachers and teachers と書かれている。Giesentanner 女史は to be teachers and leaders の書き誤りであろうと解釈した。
- 44) 米国伝道会派遣の医療宣教師 Arthur H. Adams (1847-1879) の夫人 Sarah C. Adams (1849-1925) のことか。この夫妻は1874年新島 襄らと同道して来日した (M. H., 1875, January, p. 9.)。夫人は1878年健康を害して帰米 (『天上之友』第2編, pp. 182-183.)。
- 45) 原文は Sincerely Yours in Christ である。
- 46) 本信は日附によれば次便のあとになるべきものである。
- 47) はじめ our girls' School と書き, School の部分を横線で消して Home と書き直している。ただし半年前には, タルカット女史が Boarding School と述べている (1874年5月16日附書簡) のに対し, ダッドレー女史は home と書いていた (6月20日附書簡)。
- 48) Giesentanner 女史と共に part と判読した。ただし post と読めないこともない。
- 49) 判読困難。time とも true ともとれる書体である。
- 50) Julia Gulick. ハワイ・ミクロネシアの宣教師であった Peter Gulick の末子。O. H. Gulick の妹にあたる。
- 51) この項は M. H., 1875, April, p. 111 に転載されている。
- 52) この章節と次の章節には多少の省略が施されているが前項にひきつづき, 同じく M. H., 1875, April, pp. 111-112 に引用されている。
- 53) John Cutting Berry (1847-1936). 米国伝道会派遣医療宣教師。1872年来日, 1893年帰米。(『日本におけるペリー翁』参照。伝記としては K. Berry 著 “A Pioneer Doctor in Old Japan” がある。)
- 54) 行間に挿入されたらしい2語程度のものである模様であるが, 文字が小さすぎると線のにじみとで読みとれない。またこれを転載している Missionary Herald では省かれている。
- 55) Anna E. Gulick. 米国伝道会宣教師 Orramel H. Gulick (1830-1923) の夫人。1871年来日。1892年離日, ホノルルに帰る。

- 56) 1874年10月13日附ペリーの書簡参照 (M. H., 1875, January, p. 17.)。
- 57) Bath とある。
- 58) Miss Stanwood. 不詳。
- 59) 原文は, Dr. and Mrs. Berry.....are much disappointed that she did not come: Mrs. Berry is very anxious to have someone always with her,であるが, このうち, not come から anxious までが用箋の折り目のきわにかかっているため, 写真では別のページの欄外にまわっている。
- 60) Horace H. Leavitt (1846-1920). 米国伝道会宣教師。来日1873年, 大阪在住8年にして帰米 (「天上之友」第2編 pp. 154-155.)。
- 61) prophet chamber と読めるが, 不明。
- 62) room のようであるが, 判読困難。Giesentanner 女史は the same としたが the の入る余地はない。
- 63) 判読困難。preserve もしくは persevere あるいは persuade. 但し初めの3字は pre よりも per の方が自然のように見える。
- 64) この文章の半ばあたり (原文にするとthe new comers who will be with us in a few days. の comers 以下) から用箋が足りなくなったため, 以下最後まで欄外に行の向きを変えてびっしりと書きこんでいる。そのため文字のかかなりの部分が折り目にかかって (ファイルの際にとじこまれたものか), 非常に読みにくいものとなっており, 照合の場合, 写真の他のページに写った跡と併せて行なわねばならない。
- 65) 前記 (註64) の理由もあって非常に読みづらい書き方であるが, 一応 Nesima と解読しておく。しかもちょうどこの頃, 新島 襄が, デフォレスト (John H. DeForest) 夫妻及びアダムス夫妻と同じ船で, 米国伝道会の指命を得て帰国している (M. H., 1875, January, p. 9. 参照。"Another reinforcement sailed from San Francisco October 31. Messrs. DeForest and Adams, with their wives, also Mr. Neesima, a native of Japan, educated in this country, who went with them, to give himself to Christian work, for the present in connection with the mission." とある。)ので, この追って書きはそのことに言及したものであろうと解釈した。なお当時, 新島は Neesima とつづるのが一般であったらしい。
- 66) 本信は日附によれば前便に先立つものである。

- 67) 発信地は神戸とあるが、後段の内容からすると有馬で書かれたものと思われる。
- 68) 判読不能。つづり字の少ない1語を容れる程度の余地であるが、形態、字数共に判別し難い。
- 69) 判読不能。4文字ないし5文字の1語、あえて判ずれば side かと思われる。
- 70) 明治7年夏のタルカッタ女史の有馬滞在中の行動は、湊川神社宮司、折田年秀によって、逐一当時の兵部省教部大輔、穴戸 璣のもとに報告されていたことが、関西学院大学武藤 誠教授によって報告されている（武藤 誠「神戸地方における基督教宣教師」—関西学院短期大学論叢第1号、昭和27年）。これによれば、明治7年8月31日附で、折田は有馬滞在中のタルカッタ女史をはじめとする、神戸伝道区の宣教師たちの動向を報じている。この、いわゆる「洋教探索」のため、折田は廣田神社職員2名をはじめ現地の有志の助力を得、宣教師の主催する集会に彼らをまぎれ込ませて「探索」をつづけている。報告中、「教師、デーベス」「女教師、トウカツ」等の名があげられているが、明らかにデイヴィス、タルカッタである。またこれら宣教師のもとに集まる日本人名や、礼拝の次第も余すところなく報告されている。
- 有馬滞在を報告するタルカッタ女史の書簡には、「洋教探索」の手が女史の背後にしるのびよっていた事実は、何ら報告されていない。
- 71) 判読不能。1にひきいられる3文字ないし4文字の1語と見られるが、よくわからない。
- 72) 出典不明。
- 73) この便の筆跡は従来のタルカッタ女史の書簡に見られたものとはまるきり異なり、むしろ横文字にあまり慣れていない人が1字1字ていねいに書いたような印象を与える。あるいは口述筆記であったかもしれない。そして、行間にかんがりの訂正や書き込みが施されているが、この方は明らかに女史本来の筆跡である。頭書及び署名はない。なお *Missionary Herald* はこの文面を掲載し (*M. H.*, 1875, July, pp. 196-198), 冒頭に紹介して次のように記している。A case of great interest, and apparent promise, has been reported by one of the ladies of the Japan mission to her sister in this country, and the narrative has been sent to the editor, for use in the *M. H.*

- 74) **here** は本人の加筆。
- 75) **Dr.** とだけ書かれたものを本人の手で **the doctor** と訂正。(以下、訂正加筆は本人によるものと見做す。)
- 76) **without hearing** と書かれたものを **without learning** と訂正。
- 77) **he was passing through Osaka** とあったものを **he went through Osaka** と訂正。
- 78) **M. LaFayette Gordon (1843-1900)**. 米国伝道会派遣宣教師。1872年来日, 1899年帰米 (「天上之友」 pp. 139-142.)。
- 79) **to be ignorant the facility** を **to be ignorant of the facility** と訂正。
- 80) **Dr.** を **the doctor** と訂正。またこの文章のはじめのところに改行の符合を加筆。
- 81) **the doctor told him he was in want of a teacher.....that he would give.....**の**that he** を抹消し **and** と訂正。
- 82) **Dr.** とのみ書かれていたところに **Berry** と加筆。
- 83) 原文は **Dr. Berry being gone** であるが, **Missionary Herald** ではこのあとに **now** の一語がつけ加えられている (**M. H., 1875, July, p. 197.**)。
- 84) 改行の符合がつけ加えられている。
- 85) **He has temporary lodgings.....**と なるところ **He** が落ちていたのを加筆。
- 86) **he told her.....and then he proceed** を **and then proceed** と訂正。
- 87) **on being told** を **on being answered** と訂正。
- 88) **.....he too has been.....but he was busy** となっているが, **but** のあとの **he** は加筆による。
- 89) 不詳。
- 90) **one** は加筆されたもの。
- 91) 原文では **Friday evening** であるが, **Missionary Herald** では **evenings** となっている (**M. H., 1875, July, p. 197.**)。
- 92) **he said** という挿入句であるが前掲書では省かれている。
- 93) **he began to pray** を **he began to ask the blessing** と訂正。
- 94) **He.....says he know that** を **he is sure that** と訂正。
- 95) **if it dared to do so** となっているが, **to do so** は加筆による。
- 96) 明治元年 (1868) 4月に京都の明治政府が、殺人・放火・盗みを禁ずる

など5種類の高札をたてた中には、切支丹禁制のことも含まれていた。この切支丹禁制の高札は、その後、条約改正交渉の際の米国側の要求により、明治6年(1873)2月に撤去されることになるが、このことが直ちに、本当の意味での基督教の公認、あるいは信教の自由の保証でなかったことは、本便のこのくだりからもうかがわれるとおりである。明治政府による高札撤去の理由は「従来高札面の儀は熟知の事に付」とのみであった。1873年に発表された伝道団の年次報告はこの間の事情を次のように伝えている。「切支丹禁制の高札がとりおろされたという諸外国公使への声明に続いて、国の津々浦々には、切支丹と同様に放火・盗み・殺人のすべてに対する禁令高札を外したという布告が出された。〔高札撤去の〕理由は、人々が皆それらを空んじているからだという。」(A. R., 1873, p. 72.) 事実、この高札撤去後も、なお執拗に洋教探索が続けられ(本稿註70参照)、葬礼をはじめとする基督教の行事、あるいは事業などが、様々の禁止乃至は規制を免れてはいないという状況にあったのである。(「日本プロテスタント史研究」参照。特に pp. 45-46, また, p. 117.)

- 97) a littleを somewhat と訂正。
- 98) 「先頃の失礼」とは何があったものか、書簡の文面からは判じ難い。
- 99) Langdon S. Ward, Treasurer of the A. B. C. F. M.
- 100) のちに来日する妹 Maria Talcott のことか。
- 101) 米国伝道会はこの年(1874)5月の会合で、日本における伝道団の女学校設立を方針として決定するが、神戸の学校のための費用をどこから捻出するかという点になると楽観を許さないものがあり、結局、婦人伝道会が、祈りに支えられて、醸金にあたることになる(*The History of Kobe College*, p. 4. 及び「神戸女学院百年史 総説」p. 40. 参照)。一方、日本人の側からも800ドルの寄附があって、大いに伝道団を勇気づけた。以上のことは1875年の年次報告においても言及されている(A. R., 1875, p. 59.)。
- 102) 校舎建築に関する最初の言及である。この校舎に関しては、上述の年次報告の同じ項に、神戸の適切な場所に土地を確保したこと、30人ばかりの少女たちのホームとして質素ではあるが快適な建物が建ったことが報じられている。また「兵庫縣八部郡地誌」の『雑居』の項には「米国人アダムス 山本通り四町目第六拾番地貳千百貳拾五坪 人民私有ノ地ヲ借

- り明治八年三月三十日ヨリ 貳拾五箇年ヲ期トシ洋教女教師ヲ延キ女學校ヲ設置ス」という記事がある (p. 57.)。このアダムスというのは米国伝道会の医療宣教師として来阪していた A. H. アダムスのことであろう。
- 103) qualified と読む。gratified と読めないこともないが、Giesentanner 女史と共に qualified の方を採った。
- 104) 明治8年 (1875) 7月27日, 16名の受洗者をもって始まった (A. R., 1875, p. 58. また「日本組合基督教會史」pp. 27-30. 「三田市史」pp. 704-707. 参照)。
- 105) 上記(註104)史料参照。既出のタルカット女史の書簡1874年5月16日附及びその註38にも関連がある。なお M. H., 1875, September は1825年5月現在の伝道団報告として、HIOGO AND SANDA—MISS DUDLEY の一項を設け、女史の活躍ぶりを紹介している (pp. 265-266.)。
- 106) 眼疾のこと。J. H. デフォレストの書簡にもその様子についての言及がみられる (1874年12月12日附, 1875年11月25日附)。
- 107) Mary E. Gouldy (1843-1925). 米国伝道会派遣の宣教師。1873年来日, 1885年帰米 (「天上之友」p. 184.)。
- 108) “note” とある。冒頭の ordinary note paper (「通常の私用箋」と訳出) に対応させた言葉選びであろう。

参 考 文 献

A. B. C. F. M. 宣教師文書

訳文：茂 義樹「D. C. グリーンの手紙」—梅花短期大学紀要第21号～第25号 (1972～1976)

Manuscripts : Letters of Miss E. Talcott (1872-1880)

Letters of Miss J. E. Dudley (1872-1880)

Letters of Mr. J. D. Davis (1871-1873)

Letters of Dr. J. C. Berry (1871-1873)

Letters of Mr. J. H. DeForest (1874-1880)

解説：川村大膳「アメリカン・ボード日本布教報告書の研究」—関西学院大学共同研究紀要I『明治研究』(昭和42年3月)

Annual Report of the A. B. C. F. M. (1872-)

Missionary Herald (1873-)

七一雜報（神戸雑報社・明治8年創刊）
兵庫縣八部郡地誌（明治16年，復刻・後藤書店，1977）
神戸開港30年史・乾・坤，（神戸市役所編，明治31年）
神戸教會月報（明治32年創刊，復刻・日本基督教団神戸教会，1975）
日本組合基督教會教師會編「天上之友」（大正4年）
J. Merle Davis, *Davis-Soldier Missionary*. (Boston, 1916)
神戸教會略史（神戸基督教會，大正13年）
小崎弘道編「日本組合基督教會史」（日本組合基督教會本部，大正13年）
Evert Boutell Greene, *A New-Englander in Japan: Daniel Crosby Greene*. (Boston, 1927)
大久保利武「日本におけるペリー一翁」（東京保護會，昭和4年）
日本組合基督教會教師會編「天上之友」第2編（昭和8年）
Katherine Berry, *A Pioneer Doctor in Old Japan*. (New York, 1940)
Charlotte B. DeForest, *The History of Kobe College*. (神戸女学院，1950)
小沢三郎「日本プロテスタント史研究」（東海大学出版会，1964）
三田市史，下卷（三田市役所，昭和40年）
海老沢有道
大内三郎 共著「日本基督教史」（日本基督教団出版局，1970）
小沢三郎「幕末明治耶蘇教研究」（日本基督教団出版局，1973）
神戸女学院百年史 総説（神戸女学院，昭和54年）